



「^つ積ん^{どく}読」の本棚から 〈新連載〉

こんな本どうですか？

山本良一

自己紹介にかえて

わたしの趣味のひとつは「^つ積ん^{どく}読」である。家の中の本棚はもう1冊も入らない。それでもついつい新たに買ってしまふ。しかたなく本を奥へ押し込み、手前に立てたり積んだりしている。後ろの本は姿も見えない。買うと安心して、ちゃんと読んだ本は、ホンのわずか（しゃれではありません！）。

今回このコラムの担当を依頼され、私は喜んだ。これで、積んでおいた本を読むことができる（というより読まねばならなくなる）。そんな「^つ積ん^{どく}読」本の中から比較的新しいものを紹介していきたい。

音読ブーム

世の中、とにかく音読ブームである。10年くらい前は、頑固に、しかしひそやかに「音読」に関わる本が本屋に並んでいた。ところが、このところ状況は一変した。音読に関する本が山積み、平積みなのだ。

今の音読ブームに火を付けたひとつが斎藤孝の『声に出して読みたい日本語』であろうか。国語・日本語の音読の本はもとより多いが、最近は英語の本も多く出版されている。いや、日・英にとどまらない。ドイツ語、フランス語、スペイン語、韓国語、中国語、などなどさまざまな言語が目につく。

タイトルもすごいのがある。「音読するだけで身につく」とか「音読すれば頭がよくなる」とか…。「音読してるのに、身につかないし、頭もよくならない僕ってなに？」と思いながらも、何冊か買ってしまった。

今回はそんな音読の本から2冊を取り上げる。

◎『音読王』（井上一馬 著、小学館、2002.10）

タイトルはeye-catchingだが中身はオーソドックスである。聖書から、小説、詩、スピーチまで多岐にわたって名文が並んでいる。

中でも私は詩が好きなので、まず拾って読んでみた。たとえば、高校の時に感動したPoeのAnnabel Lee。本書には二連しか掲載されていないが、久しぶりに音読してまた感動した。R. FrostのThe Road Not Taken, R. L. StevensonのThe Swing, H. W. LongfellowのThe Rainy Dayも私の好きな作品だが、音読してみて、やはり詩は、音読して初めて真価がわかるものだと再認識した。

それからスピーチ。これも音読されることが前提の文章である。本書ではJulius CaesarのMark Antony's Funeral Speech, Animal FarmのOld Major's Speech, the Rev. Kingの“I Have a Dream”などが取り上げられている。残念なのは“I Have a Dream”がほんのわずかな抜粋しかなかったことである。相当量のスピーチだから全文は無理としても、せめて“I have a dream.”という言葉が繰り返して出てくる部分くらいはすべて載せてほしかった。

また、日本人の書いた英文が取り上げられているのも本書の特徴である。津田梅子、岡倉天心、新渡戸稲造といった英語の使い手の文章には、人に訴えかける力がある。さらに、戦後多くの中学生が使った教科書JACK AND BETTYの2nd Stepから“Washington and the Cherry Tree”が入っている。これが中学校2年生で教わる文章か、と感嘆した。I love an honest boy more than anything else in the world. という父親の最後の言葉など、今なら高校2年で教わっても

おかしくないような文ではないか。

英文には日本語訳と解説が付いている。訳詩としても知られているもの、たとえば、「埴生の宿」、「蛍の光」、「庭の千草」などは、それも紹介されている。解説は簡にして要を得たもので読みやすい。further reading を載せているのも親切である。

この手の本には必ずと言っていいほど CD が付いている。本書も例に漏れないが、音読はなかなかうまい。たいていの場合、イギリスの作品はイギリス英語、アメリカの作品はアメリカ英語で読まれており好感を持った。ただ、Peter Rabbit や Alice などイギリスの作品をアメリカ英語で聞くのは興ざめであった。それと tongue twister をゆっくり読んでいるのもどうか。しかし、概してモデルとしては合格である。

◎『耳で聴きたい英語の名文』

(古家 淳、ロバート・ジュペ 著、雷鳥社、2002.12)

先ほどの本の少し後に出版された。掲載されている英文は『音読王』と重なるものが多い。というより、名文を選べば、重なりが生じるは当然のことであろう。しかし、扱い方は少々前書と異なる。

まず、可能な限り全文を掲載している点である。“London Bridge is Falling Down” は色々なバージョンがあるが、本書には11連も載せてあるし、“I Have a Dream” や J. F. Kennedy の大統領就任演説など相当長い物も全文納めてある。それから、文章の前に付された解説が丁寧である。はしがきによれば、ジュペ氏が英語で付けた解説・解釈に、古家氏の独自のリサーチを交えて日本語にした、とある。実は、ジュペ氏とは職場での team teaching がきっかけで親しくしており、彼のことはよく知っている。リベラルな知識人でユーモアあふれる人柄。さらに日本の英語教育事情にも詳しい。そんな彼の解説は、日本人読者のために文化的な背景にも言及してくれていて助かる。

英文は、nursery rhyme、小説、詩、スピーチなどバランスよく選ばれている。中英語の作品（『カンタベリー物語』）まで掲載しているのも評価できる。

ただ、この本の唯一の欠点はその朗読である。付属の CD は概して原作の雰囲気を伝えていない。イギリスの作品も現代アメリカ英語で読まれ、早口言葉も非



音読王
——心にきざむ英語の名文
井上一馬 著
2002.10, 小学館
本体価格 1,600円

耳で聴きたい英語の名文
古家 淳/ロバート・ジュペ 著
2002.12, 雷鳥社
本体価格 1,500円



常にゆっくりと読まれる。またチャオサーの朗読は入っていない。脚注には「あまりにも古い文章なので、忠実な発音による朗読は困難」という弁明があるが、中英語の研究によって発音はかなり解明されている。事実、学生時代には、物語冒頭の“Whan that Aprill with his shoures soote...”というくだりをテープで聞きその響きに心惹かれた。ぜひ「耳で聴き」たかった。一方、King, Kennedy, Roosevelt, Reagan のスピーチはオリジナルが収録されており、聞き応えがある。

おわりに

音読ブームはまだまだ続きそうである。実際、音読の本は続々と発行されている。最近出たものでは『感動する英語』（近江誠 著、文藝春秋、2003.12）が文章、解説、CD ともに出色のできである。いずれにせよ今後とも目の離せない分野である。

最後に読者諸氏へ素朴な疑問をひとつ。付属の CD は多くの場合、裏の見返しに付いている。これだと読み進めながらページがめくりにくい。表の見返しに付いていればその不便はないのだが…。CD をはずして読むこともあるが、本と別々になりそうでちょっと抵抗がある。どなたか、CD のよい扱い方（あしらい方）をご存じの方はご教示いただけないだろうか。

まあとにかく、みなさん、英語の音に満ちた楽しい英語教室を、この1年間作ろうではありませんか！

(やまもと りょういち・筑波大学附属高等学校教諭)